じかべ、忍ぶは便よからるべしとて、各々散々ゐ別れゆきぬ。サクソン語に通したるものゐ鎧を捨てゝ森を越え、便宜の海邊ゐ出るもあり。通せぬものゐ猶も鎧と馬とを捨てず、小途と尋ねて逃るもあり。二人の僧正ゐ辛うじてエスセックス州の子スゐ達し、獵船一艘奪ひ取りて、波のまに〳〵漕がせしかべ、フランスの海邊ゐ着きし頃ゐ、饑と波とゐ侵されて、半死半生の体なりき。他の人々ゐ猶ノルマン人の據りゐたる堡の中ゐ逃るゝあり。或ゐ海邊の巖窟ゐ身をべ潜めて便船の來るを待つもあり。そもそくまでゐウ非ルリヤム公の旗下のものども、散々ゐイギリス國と逃亡して、殘忍無慙の醜名を千載ゐ殘したるゐ如何なる時ぞ。是なんヤソ降誕後一千五十二年の事なるとぅや。

第三回　政治家の演說

ウァイタンの集會ゐ、ウェストミンスタルの大廣間ゐて開かれたり。エドワルド王ゐ馬手ゐ抜劍と握らせ給ひ、王の御座ゐ着御あり。玉座の前後左右ゐ、侍從の面々隙おき迄ゐ並び居つ。其次ゐは、王の懺悔を聽聞の僧正達と始として、御祈願所の法師共盡く扣へたり。此法師どもと其名こそ卑しけれ、其實威權甚だ強く、國璽と已が手中ゐありて、賞罰刑政一つとして、其意の如くならざるとなし。斯る事と王の御先代ゐ例なりし事なれば、サクソン人ゐ取りてと、いと煩しき限りなるべく、後來人の膽を寒からしめ、閻魔の廳とも稱ふある刑法院と、之ゐ原づきてぞ起りける。

此一列と少し離れて、ウァイタンの主立ちたる人人あり。先づ第一と敎法の道を司る諸の僧正ゐて、ロンドンとカンタバリーとの兩僧正の坐とゐきてあり。サクソンの僧正中ゐて最も目立ちしは、勇壯貪欲なるステ非ガンドと、柔和忠直なるアルレッドの兩僧なり。此次は副王と稱ふる大諸侯の座ゐて、スコットランドの副王マルコルムは、マクベスの爲めゐ國を逐とれて、ノルサムブリヤ侯シウォールドの許ゐ逃れおとせ

ば、此席に列り給はず。又グリフィスとてシメリー全州を伐り從へ鬼神なりと世に呼ばるゝギヲット公も居合せ給へず。されどもウェールスの小副王にて、アムブロシウスの國土を亡し、アーサルの矢先を事ともせざりし方々へ、黄金鎖の襟飾をなし、髮の毛へ耳額の邊を短やうに切りそぎつるが、瞬もせず扣へたり。副王と同席に列りし面々へ、王家の干城たる諸侯にて、今日へ只三人のみ出席せり。其三人へ皆ゴドウィンの敵手なるノルサムブリヤ侯シウォールド、メルシヤ侯レオフリック及び王の御親戚なるをもて、ノルマン人と共に朝廷を去らざりし、ヘレフォールド侯ロルフ是なり。同席にていあれども之より少しうち離れて、小大名と高位の旗下と並み居たり。

此次の席を占めたるへロンドン府民の議員にて、勢力はほとんど議院の評議をも變ふる程ありて、いづれもゴドウィン家最負のものどもなり。席を同じうして議員の中にも最も人民に關係ある人々並み居たり。此議員へ人民を代表するにへあらねども、人民より最も貴ばるゝ、武勇と富との証票たるべき地所と領する士にして、門地財産互に大く異れども、その尊敬へ一つにて、おの〳〵劒と身にそへて、威氣嚴然と坐し居たり。此處に五町の所領に誇れる弓手組のサクソン武士あれば、彼處に已が四十町を不足とするダニシの侍あり。或へ朝廷の官職に奉務するもあり。或へ命を的にして三たび海を渡りたる商人もあり。オッファ及びエゼルドの皿統ありと人に驕るものあれば、祖父の時迄へ百姓とあり、又へ羊飼たりし者もあり。サクソン人の子孫もあり。入口近き末席に群れ居るへ、最も多人數のシオルにて、討論と投票の權へなけれども、さりとて勢力おきにもあらず。元是輿論の代表者なれば、王公僧正の議員にも、此シオルの意と受けて、決議する事殊々なり。

さるほどに開會の式も畢りて、エドワルド王の勅語ありたれども、今日へ御聲低くして、御側近く居たる人々にのみ聞えたり。ゴドウィン侯へ六

人の公達を後邊ゐ隨へ、突と立ちあがり給ひしゐ、座中動揺めき渡りしが、侯が座中と見廻して口を開らんとしたまふ折ゐい、皆々靜まりゐへりて、ロルフ侯の頬の邊ゐ、ぶんと飛び來る蚊の聲とも、天井ゐ網張りゐくる蛛の音とも聞き得べし。ゴドウ非ン侯い首を低れ、老錬の辨舌もて靜やゐゐ說出しつらく、

今い殘り少なゐなりたる拙者が生命と擲ちて、太平ゐも戰爭ゐも常ゐ誠心を盡したる、(失策せしい數々ならめど)此イギリスゐ歸り來て、陛下を始め奉り方々の許諾と受けて、墳墓の地ゐ骨を埋むる所と撰べさせて給いらん事を、ひたすら願ひ申さん爲め、再び慣れたる空氣と吸ひ得し、其歡を咎め給ふ方々いよも此席ゐ居給いじ。此イギリスの危究ゐ際し、數々拙者が詞を聞られし此會ゐ、再び臨みし歡を、誰ゐい咎め給いんや。今猶拙者ゐ敵ゐらば、其敵中ゐも此老人が歡び思ふ心をば、奪まざるものなゐるべし。如何ゐ方々。

若し方々が理義の爲め、此班白の流人ゐ向ひて、「イギリスの空氣中ゐて汝は末期の呼吸を爲すべゐらず。イギリス國内ゐい汝の骨を埋むる地なし」と云いねばならぬ場合ゐ到らば、誰ゐい嘆き給いざらん。そを云ふ爲めゐ歎ゐざる方々いゐらざるべしと信ずるゐり。(茲ゐ忽ち首を擧げ一坐の人を見渡しつゝ)また方々の内誰か斯る詞を言放つ勇氣と心とを持ち給ふや。いゐ持ち給ふ方々いよもゐらじ。拙者い拙者が是非を議し、拙者が無罪を宣告する最も適當の集會ゐ、命の竟ゐ臨み得たりしを、天を仰ぎ地ゐ俯して、喜び思ふ事一方ならず。抑も拙者い何等の罪ゐりて國を逐いれし事やらん。抑も何等の罪ゐりて拙者等父子七人い、無慚の放逐を受けたりしぞ。拙者が申す由の始め終を、詳ゐ聞き王ひて、公明正大の御處置を願ふ處なり。

さいつ頃、ブーロン公ユースタースが陛下の御處ゐ參内せし歸る

さ、其同勢い物具を着し軍馬ゐ打乘りて、ドーヴァル府ゐ入り込み、吾邦の掟と慣習をも知らざるゐや、(斯く事輕く申し述ぶるも、過ゐし事いなるべく穏ゐ捨て置きて、誰をも傷つけまじとおもひひへばあり)理おくも府民の家を襲ひ取りて、おのゞ旅宿と爲したりき。方々の知らるゝ如く、是れぞサクソン人の權利を損ふ最も重大の事共なり。方々の知らるゝ、如く、如何ある無下の賤夫ゐても、家は其城郭あり」といい諺ゐも申す事ゐひいずや。左ればこそブーロン公の從者の一人ゐ向ひて、其家を奪いれたる府民の中の何ゞしゞ、此諺を守りつゝ、兎や角と爭ひたりしゐ、彼の從者い忽ち怒り、腰なる太刀を拔きもちて、うの何ゞしゐ傷つけたりしゐば、何ゞしもいうで耐ふべき、此ゐ至りて竟ゐ從者を殺しひひき。ユースステースいうくと聞くより、やゞて從者を引きつれて、其場ゐ駈けつけ、何ゞしのイギリス人を、無慚ゐも自宅の内ゐて又ぞろ殺したりしぞうし。

と聞きも畢らず、廣間の末席ゐ群れ居たるソオルどもい、怒ゐ耐へず、罵りたちてみえければ、ゴドウィンン侯い両手を擧げて推し鎭め、再び陳述し給ひけるい、

斯くて後、外國人ばらい拔身のまゝ市中を乘り廻し、自ゐ觸れたるものい之を殺し、無慚ゐも馬足ゐうけて小兒をさへも蹈み殺せり。斯くと見るより府民共い一同ゐ起り立ちてひひき。あれうゝる勇敢の府民等を、吾邦ゐ授け賜ひし天つゐ神の有難さよ。府民共い吾々イギリス人たるゐ恥ぢず血戰なし、二十餘人のおごる敵と擊殺し、殘る奴原とい府外ゐ遂ひ退けひひぬ。ユースステース公い疾く逃げたり。公い賢き人なるうな。公い途ゐ休みもやらず、殆と食事もなさずして、當時陛下のおいしましたるグロースタルゐいそぎ參りて、訴へ奉りぬ。陛下い只公の陳述せる片便をのみ聞うせ給ひしうゞ、府民の方のみ惡し樣ゐ思召し拙者ゞ領下の事

なれば、勅使來りて此ゴドウヰンへの仰おゝ「朕が血緣たる人お對し不禮を働く不埒の奴原疾く軍律お相照し、亂暴せし者共をゞ一々屹度罰せよとの宣旨おてこそいひつれ。今此席お臨み給ふ諸大名の方々よ。若し方々が領下の士民お政を施すお當りて、正當の事を爲す心もなく、又正當の事をあす力も無くんゞ、其領地ゝ如何あるべしと思ひ給ふら」。左れば拙者ゝ、軍律お照して府民を罰する事をゞせずして、(若し軍律ともて府民を罰せゞ、全府の人民盡く擧りて、一律の中お落つべし)先づ府民の古老を集へ、事の樣と問ひ質し、彼等が申す次第とも、事詳らお聞らせ給ひし上おて、とうの御沙汰あらまはしと、願ひ申せど、聰明叡智の陛下おゝ、不幸おも不迎おも、此ゴドウヰンと怒らせ給ひしか、抑もまた外國人の辯舌お說き迷ゝされ給ひしやらん。エドガルカニウト兩王の定め給ひし御政道、即ち拙者が願ひ奉る此方法をゞ許し給ゝで、拙者ゝ宣旨お背けりとて、否ウォルノスの嫡嗣ゴドウヰンが太刀物具を身お着けて馬手お創手隨へつゝ、ドーヴァルの自由府お乘り込まぬとて、外國人ゝ陛下お勸めまゐらせつゝ、グロースタルお開られたるウァイタンの集會お、自身出頭せよとの勅諚あり。(自ら犯せる罪おる如く、そもこの集會も外國人多くして、元來拙者とドーヴァルの府民とお、至當の處置を行ふ爲めおゝならで、イギリス國の自由の上お、ブーロン公の勝利と固くし、イギリス人と犧牲お して、公の怒を解かんが爲めなりけり)

拙者が躊躇せし故お、放逐の罪を受けていひしかゞ、身を守るため、又イギリスの掟を守り防がん爲め、急ぎ兵を起していひき。イギリス人が自宅おて、屠り殺さるゝが如き無理無道又ゝ罪なきお小兒等が外國人の馬足おかけられ、蹈み殺さるゝ無慈悲殘逆、などの事なきためおと、兵と起していひき。エドウルド王陛下おも、御旗

を擧げさせ給ひ、朝兵を招き集め給へば、それゐ居らるゝシウヴー
ルヤ、レオフリックの兩侯ゐも、朝旨を奉じ陛下ゐ馳けつけられ
しも、是れ拙者ゞ兵を擧るの意と未だ知られざるより出でたる事
ゐて、拙者ゞ一擧の正義も知れ、味方は同胞人の爲めゐ起り、敵は外
國人を助くる爲めゐる事を詳ゐせられしゐや、兩侯も理義ゐい曉
く忽ち和解と謀られたり。拙者い今日此處ゐて開かれたる、處も
同じ場所ゐして、開ゐるべきかのウァイタンの集會ゐ、委托する事
ゐ同意して、すべて兵士い解き去らしめしゐ、外國人は陛下と說き
進めまゐらせて、兵士と留め置くのみゐらず、勅使を以て遠近より
軍勢を募り、剩へ海外迄も催促したり。拙者自ち謹みて、ウァイタ
シのロンドンゐ集るを待ち居しゐ、豈計らんや國會は武備嚴重なる
在樣ゐて、然も着座と占めたるは、皆ノルマン武士なりけり。斯ゐ意
外の集會い、拙者父子の曲直を判斷するゐ適當ありと方々い思ひ給

ふか、聞かまはし。されども拙者い之ゐも關せずして、若し常例の
如く生命ゐい惜ゐしとの保證さへ賜はらんゐは、出頭すべしと再
度迄請求すれども許されず、却て國を逐とれたり。事こゝゐ至れ
ばせんかたなく、墳墓の土地を立去りて、今こそ歸りていゐれ。
ブーロン公の婿ロルフ侯い聲を擧げ
兵を携へ歸られたり。
ゴドウィンは再び口を開き
さあり、兵と携へ歸りしも、仁愛深き陛下の御耳ゐ讒訴する外國人
のゐるゞ爲めなり。ロルフ侯實ゐ兵を携へ歸り來れり。其物音を
聞くとそゞ儘、外國人は逃げ散りたり。今は兵馬も不用となれり。
此處ゐおゝする方々は、吾邦同胞の人々ゐて、君臣の間を割かんと
するフランス人は一人もなし。如何ゐ方々。抑も今回の動搖を
引起せしゝ、ゴドウィン父子か、又は逃げたる外國人か、父子の流罪は

正當なりしか、歸國の折ゐ兵を携へしは過失あるか、決斷と請ひまゐらすなり。いかゐ方々。方々の側なる御太刀ゐは、一滴の血汐の痕もなし。何ゐもせよ、父子の命運をば方々。ゐ御任せ申すなり、といふは、イギリス人とイギリスの掟ゐ任する事ぞかし。拙者が此處ゐ出頭せしと、天地ゐ誓ひて罪なきと申し開かん爲めゐてい。方方の内ゐは拙者が無罪を共々ゑ誓ひ賜とるもゐはすべく、又た陳述したる事の顚末、不分明の廉もいはんゐと、そと證明し賜とらんもあるべし。又た拙者が朔共は拙者が血と分てる外ゐ罪のゐるべき樣もなし。その血といふは外ゐらず、ゴドウヰンが國の爲めゐは何時ゐりとも惜まず流せと命じ置きたる忠と義との熱血ゐこそいなれ。

と述べ終りたるのみ、更ゐ得意の辯とゞ掉とで、徐ゐ公達方の後邊ゐ退き給ひしかゞ、言ふゐや及ぶ、侯の無罪は勿論ゐりと、扣へ居たりし列座の面々、異口同音ゐ一層の感情と發したりしが、公達の中より太郎君ゥェイン御眼指も定まらず、御足の運もそは〳〵しながら、立出で給ふを見て、一坐は戰慄く如く動搖々々罵り合ひたるを、太郎君は斯くと見て忽ちゐ立止まりつゝ、馬手を擧げ給へども、胸塞がりてや、御聲と唇の内ゐ消え入りて、人々を見やり給ふおもゝちは、憤怒ゐあらで愛憐を請ひ給ふとぞ見えたりける。其時アルレッド僧正は坐を立ちて、平生すゞしき聲も何とやらんけふは澁りがちゐて、

ゴドウヰンの一子ゥェインと陛下ゐ對する罪なしと申し開きとせん爲めゐ、進み出でしゐや。もしそれならゞ無用なり。此集會ゐてゴドウヰンを許す時は、家族と無論の事ぞかし。されども帝王中の帝王なる神明ゐ對し奉り、口へ出すも恐るべき反逆の罪と侵さゞりしと、ゥェインと誓ひ得るや否や。愚僧も一度は汝を愛で慈みし事もありき。今とても猶汝が一族、愛で慈しむとする

ものから、神の事ふる身のしおれば、職務の爲めの是非もなし。

と暫じの間歎息しつゝおはせしが、急の心と取り直し、躊躇らはぬ聲音きて述べ給ふやう

汝スヴェイン。惡魔の爲めの魅られて、レオミンストルの尼アルギヴと淨域より連れ出だし、妊娠なせし大罪あり。

と詞も未だ終らざるに、シヴォールドは突と立ち上がり、大音聲にさて又た拙者い、スヴェインが公戰をバせで、卑怯にも彼が從弟のボルン侯を謀殺せしこそ、許し難き罪惡なりと、方々の面前にて公言致す。

列坐の中にて德望官位共にすぐれし緇素兩雄の詞につきて、その感覺は一方ならず、先にゴドウィンの詞に感せざりし者どもは、今こそ怒をあらはしつゝ、光り鋭き眼も、てやつれながらも猶氣高き大郎君の顏を睨むもおり。ゴドウィン家を推し戴く罪も今はスヴェインと懸み思ふ者絶えてなく、或は歎息しつゝ、打ち俯き、或は爪彈きして顧みず、忽ち敵となりたる中に、只廣間の末席に群れゐるシオルの中にのみは、最と氣遣はしき面地して、手に汗握る者往々ありけり。さるは此二條の罪過、世に聞えざりし往昔は、ゴドウィン侯の御一門中、勇猛快活にて世の愛敬を受け給ひし事、太郎君にまさる方々あらざりし故なるべし。されど一坐寂然として誰一人口を開く者もなく、ゴドウィンは御肩衣の袖もて面を被ひおはすれど、只御側に居る人々のみ侯の動氣高くして、御足の戰くを知れり。御兄弟も皆々恐れて太郎君の側を去り給へども、ハロールドのみは泰然と三歩程進みて、兄君の側に立ちあたりを見つめておはせども、御詞い出し給はず。その時太郎君いハロールドの側に來給ひしに、わづかの力を得給ひけん、

已に八年の昔となりたる拙者が所行い、當時の陛下の勅免を被りたりき。又ウィタンの集會にて、同罪の爲め兩度迄、詮議を受

けし何はおらず。こは大小の事件お依らず、國の掟てとこそ心得たるお。

ゴドウィン侯のさすがのがれぬ父子の情、恩愛の羈絆お引かされて、思ひ切り得たり〳〵。國の掟ぞ汝の干城。

とお聲を擧げ給ひ、

メウェイン、と再び首と擧げ給ひ

其干城おは頼み申さず。太郎が掟は玆ふあり。(と御胸板を叩き給ひつゝ)此掟とそ太郎をば再三再四責むるのみならず、日お增し月お溝き返る苦惱の雲を晴さんとて、其處ふむとするアルビット御僧の膝下お跪き、凡夫を包む罪障と、懺悔したる事もあり。其御僧お第一おロを開きて、拙者が罪を鳴らし給ひたればとて、少しも恨とは存じ申さず。御僧のよく知りておはする如く、拙者は弱冠の頃よりして、如何なる前世の宿緣お、彼のアルギヴと思ひはし、彼も拙者と惡からず慕ひ思へば、心お互お夫婦と末ゥけて契りし折しも、ハーデッカニウトの御末年、理と非お枉げる、力の世の中なりしかば、アルギヴは心おらずもおめ〳〵と、無慚や寺院お入れられたり。其後再會したりし時は、恰も凱旋したる折ゥらふて、意氣揚々たる最中なりき。嗚呼拙者が罪こそは最と深けれ。されども拙者が願ひしは、アルギヴが一旦誓ひたる寺の掟と取消して、それを弱冠の時より戀ひ焦がるゝ拙者が妻お為して賜はるべしとの事より外お、待ちざりき。許させ給へ、當時お人間界を籠絡もる、宗門の力は箇程まで強きものとは思はざりしを。

と唇戰き眼ざし怒り、御母上の氣象面お現れて、曾しの程は邪教を信ずるダニシ人ゥと疑ふ計りなりしが、忽ちおぼし返しけん、徐やゥお胸打し給ひ

如何なる天魔の見入れしゥ、罪障こそは深かりけれ。其罪障は拙

者一人たとひ其身を穢せしも、アルギウゐい罪はなし。彼い逃れて今い早や死出の旅路よ赴きぬ。

されゞそのかみ、陛下の御怒い一方ならざりしうば、そを第一ゐ解かんとて、務めたるい玆ゐ居る弟ハロールド一人なりき。今更責むるゐわちねども、從弟ボルンい面前のみ深切の様よ見せうけて、影ゐてい奸計のみ企てつゝ、拙者ゞ所領を奪とんとの、下意あるを推せしかば、彼を拘留したりしも決して殺さん所存ゐいわらず。然るゐ拙者ゞアルギゞを悲み思ふ折も折とて、面り悪ざまゐも、口を極めて罵詈せしゐぞ、思はず怒のやるうたなさゐ、一太刀を扳き放せり。嗚呼吾ながら吾身の罪障、返す〳〵も深りりき。斯く申せばとて、望もあり、權威も戀ひしき昔の如く、身の罪を輕くせんためならず。其時よりして世の中の善悪、共ゐ經歴したり。ある時い海龍王の子孫ゐ愧ぢず荒磯ゐ舟をよせて、ダニシ人と及を交へ、吾親戚たるカニウトの王位い既ゐ吾物と夢みし事もありつるゞ、忽ちゐして世を忍ぶ落人の身と爲り果てつ、又もや時節ゐめぐりあひて、再び國ゐ迎へられ、アイシスよりウァイ迄の領主と迄も成り上ゞる、盛衰榮枯い變とれども變はらぬものい朝ゐ夕な、目先ゐ浮ぶ尼の顔と、從弟の血汐のみありき。されゞ此處ゐ參りしも、更ゐ勅許を請いん爲めあらず。たとひ勅許い受くるとも、胸の憂い解く由なけれゞ、拙者ゞ爲めゐ、父及び弟どもの身の障を拂いんとての心あり。拙者ゞ此處ゐ參りしい、方々の憐と請ひもせず、又方々の判決と恐れもせず、只自らゞ身の行末を、方々ゐ公言なさん爲めぞうし。拙者い今より弓矢を捨て、徒歩跣ゐてクライストの御墓ゐ詣で、墓の前ゐて吾身の罪障を懺悔申して、人間よりい得も受けられぬ御許を受けまく思ふ願のみ。ハロールド汝い太郎ゐウェインの代りゐ此處ゐ來れ。いろゐ列座の御方々。此世ゐ存

へ居る者の爲め、正當の御評議こそあらまはしけれ。今此處と去るスウェインい、方々ゐもイギリスゐも、いや死したる者と思しめせ。

と衣の袖を胸ゑ掻きよせ、見向もやらず、群れ居る人を推し分けて、いや外の方ゐ出で給へば、面見合する一座の人々、日影と覆ふ雲晴れて、そら打仰ぐこゝちせり。

ゴドウヰン侯い猶も御顏を被ひたる双の御袖を放ち給いず。ハロールドいいと氣遣いしげゐ人々の顏打守り給ひ、ガルスいハロールドの御側ゐすり寄り、常ゑ愉快ゐおいすレウォファインもいと悲しげゐ見え給ふ。御年若きウォルノスい御顏蒼ざめて慄き居り、剛勇ゐるトステヰグは黄金の鎖を手まさぐりゐし居給ふ。中ゐ嚴肅ながらも柔和ゐるアルレッドの御胸ゑぞ、たゞ一聲の御歎い聞えける。

第四回　送君千里須一別

前回ゐ記したる集會の決議ゐ依て、スウェインと再び國を逐い れ給ひ、ゴドウヰン侯と他の公達は全く罪なかりしとて舊の如くゐなり給ひぬ。されば今迄弛み居たるイギリスの紀綱も、再び振いるゝ世となりしうば、マクベスい已が領地ゐ恐れ戰き、ウェールスのグリフヰスい皆々ゐ用意の篝を燒うせつゝ、物見ゐ怠なきうちゐも、ロルフ侯い左遷の身と爲り給へど、王が御親族の事なれば、唯是れ公議ゐ對する名のみの左遷ゐて、多くの軍勢賜いりて、ウェールス人が侵略すべき王の御領所の邊境ゐと、遣られ給へり。逃げ散りたるノルマン人の後ゐいサクソン僧都僧正等入込て、人々安堵の思とあしぬ。ゐゝる處ゐ、エドワルド御一方のみは、御寵愛のノルマン武士ゐ別れ給ひて、イギリス產の御后を呼び返し給ひたれば、その御心中御不滿勝ゐおとすあるべし。

此時代の習として、二心なきを表するため、ゴドウヰン侯は人質をまゐらせ給ふ事とはありぬ。此人質の撰ゐ當り給ひしは、末の御子ウォルノ

ストー、御孫ハコー二方ふて、御評議の末、ソルマン公ウォルリヤムの御手元ふ預けらるべしとの事ふ決りぬ。元來ゴドウォン侯ゞ許され歸り給ひしは、イギリス國ゞ再ひ御手ふ入りしと同樣なれど、其人質を國内ふ置くと最と心元なき次第ありとて、エドワルド王ゞゴドウォンの忠誠無二なるを認め給ふまでは、ノルマンデーふ遣はし、給ふ御下心なるべし。かゝりしものと、神おらぬ身の誰かと知らん、此人質こそ後ふ禍の種を殘しおく、いと大きなる獄となれりしこそ是非なけれ。

ゴドウォン家の處置も已ふ事濟みとなりしかど、鄙も都も野ふ山ふ土の鼓をうちつれて、太平謠ふ夕まぐれ、ヒルダと獨、ソル神の祠の前ふ立ち居たりしゞ、雲間の夕陽は紫と赤とを染めたる山の端ふ、早や沉まんとしつゝ光をゝさめ、邊遙ふ見やれども、又た人影も見えぬ處ふ、双の手もて枝ふ縋り、人待氣ある面地よて來る人あり、とや知りたりけん、又は年頃の慣ふて、耳聰き事の常ふこえたる故ありけん、沉む前ふは來るべしと、つゞやきあゞら祠の板敷ふ凭り掛り、首を低れて居たりけり。稍ありて二人の人影、路の側に現はれ來つ、次第ふ岡ふ近づきて、老媼の居たるをそれとや見けん、此方をさして登り來ぬ。一人は巡禮のいでたちよて、頭ふ帽子と被らざれど、情欲の爲めふ荒らされし優美と威儀とを備へたる、顏をこなたふあらはしつゝ、伴なる人ふ縋り居たり。伴なる男子と、當時貴族の常とする臂鎧と着けねども、容体何となく威望ありて、人の上ふ立つ貴人ありとゝ、一目みるより知らるべし。此二人程人品恰好の互ふ違へると、又あるべしとも思はれねど、血統の緣か自ら面ざし似たる所あり。此伴なる人物ゝ此日こそもの憂としげよ見えたれども、靜肅艶冶の中ふ自ら威儀備はりて、未だ情欲の爲ふ顏の荒らされたる事もなく、美しき容貌は、心の正義なるがため威儀の凛然たるをあらはしたり。夕日の光ふ照らされて、黄金もて粧ひしかとも思ふ計の、鳶色の髮は額の邊ふて分かれしゞ、肩の半迄垂れかゝれり。色濃き眉毛と一文

宇ゐて、ノルマン人とと異なれど、其雄々しさ云ふ計おく、頗と武藝と習ふとて、日影ゐ燒け焦げたれども、壯年の花と日ゐ燒けたる鐵青銅の下ゐ開き、丈は人並ゐ過ぎたるゐはあらねども、釣合の好きゑため、膂力他迄も強きを知るべし。これぞ誠ゐサクソン固有の美男子の容貌は、一つとして備はらざる事おき姿よと見えたる中ゐ、最も目ゐ立ちて見えたるは、獨立獨行自ら信するの厚き氣象よりや出でけん、帝王も屈し難く危險も乱す能はじと思ふ計の、沉勇と威儀とゐぞおりける。その沉勇と威儀とは、往昔印度人ゐも備とりてありしものゐて、人々おの〳〵權威を有てる社會ならでと、いとも稀なる氣性なり。羅何の詩人の佳句もて之を稱へしおり。曰く

かの君い恐るゝ事こそ世ゐ無けれ
その國い君こそ自身ゐ捧げたれ

かくて流人スウェインと、ハロールドの御兄弟と、名高き巫女の前ゐ立ち玉へり。ヒルダとしかと二人の方打見やりておりつるゑ、とては流人の方ゐのみ見る眼は留まりて、寶ゐおいれなるかもゝちしつ、心もとけてぞ見えたりける。やゝおつてヒルダ

かくまでおば〳〵雷神ゐ問ひ、夕日ゐ向ひて、心を誌ししゴドウン侯の太郎君を、かゝる樣ゐて見るものかゐ。君ゑ爲ゐは楡の木ゐ呪文を刻み、死者の墳より陰火を呼出しゝ事もおまたありしゐ、

スウェイン

ヒルダ伯母御よ。太郎は御身ゑ時けりし種ゐつきて、御身をば責めやさず。秋の登は取收めぬ。刈りたぬ鎌いはや折れぬ。今い御身の魔術を廢して、この行先は吾ぜんやうゐ、わゑ神人の御墓より、放つ光明を拜まれよ。

巫女と頭、を低れ

信心い風の吹來る如きぞうし。今ま木ゑ、わゑ枝ふく風ゐ、梢ゐおち

べし止まりて呉れよと、言はるゝものと思ひ玉ふな。又た人が信心ゐ向ひて、吾心中ゐ汝の翼を畳み置けと、言はるゝものと思ひ玉ふか。御身の命いとや現在ゐ用なきものとありたれば、御身の魂の自から休まる處ならば、何處ゐなりとも行き玉へ。うとし給はゞ、此後御身の上を占はんとする事わらんとも、彫付おきたる楡の木の呪文い、その時もはや痕なくなりぬべし。生まれ給ひし其日より、天つ御神の定め給へる處ゐ御身はゆき給へ。御身い事成しがたき戀慕の淵ゐ沉み給へり。妾が嘗て占なひしは吾遠つ祖神ゐ三心なく信心する人の内ゐとそ、御身の戀人い出でんとおもへり。御身はシャール王、又バイキング王の御名譽を慕ひ玉へる故ゐとそ、妾は御身の持ちたまへる斧をも祈禱し、又た御身が船の帆柱ゐも帆を織りてはまゐらせたれ。人其望をこの世ゐ懷きて居るうちい、ヒルダいその運命を指揮する事が出來るなり。去れども心が一旦死灰となる時い、妾い死骸と引わぐると同樣ゐて、遂ゐい再び墓の内ゐ落ちぬべし。さいいへ、スウェイン君、近く來ませ。妾い子守歌をうたひつゝ、御身の寢臺を動かせながら、寐せつけたる事もありしよな。

ときゝて流人のスウェインい、顏打そむけつゝいふがまゝゐ近よりゆきぬ。ヒルダいやをらスウェインの手を取りつゝ、嘆息し、その手のひらの筋と吟味せし時、あはれみと愛情ゐや堪へざりけん、スウェインの帽子を取りのけて、その額を接吻しぬ。ヒルダ

御身の手筋い、御身を詈る多くの人と、御身を歎くわづかの人のそれよりも幸多く組織せられたり。彼等が失ふ處ゐも御身い得べし。鋼も御身をうたざるへく、嵐も御身とゞ吹殘さん。御身い御身が進みゆくその命運ゐ達すべし。夜來りて荒野の靜まる如く、勇士のおちぶれい穩和なり。

スウェインに之を少しも感動せずして聞き居給ひしが、手を以て顔を覆へどもなほ握りつめたる指の間より流るゝ涙を留め兼ねし、ハロールドの方を向ひし時に、彼のすさまじく明かなる眼に、涙を帯び給へり。さて宣ふやう

さらば二郎。もはや汝に吾と共に來るなよ。

ときくよりハロールドに驚きて手を廣げしに、スウェインその胸にぞ抱き付たり。しばしのほどに忍ばんとすれど、えたへぬ泣聲の外に何も聞えぬまで、誰が胸より咳の響のいづるとも、知れぬばかりふしつゝうと、互に抱きつ抱かれつして、おのれせしが、スウェインに手を放ちて、つぶやくやう

吾子ハコウに、母もなく父もなきに、外國に人質となりて行くとぞ聞く。汝に忘れずに彼を助けよ。行末までも母とも父ともなりてくれよ。

といひさま岡をうけくだれり。急ぎハロールドに追ひすがりて走りしが、スウェインに立ぞまり、うなしみながらのたまふに

それに汝の約束にたがへり。同じ兄弟の中にさへ、信義を捨てらるゝ、ほどに、さても吾に零落せしか。

其哀しげなる怒の聲に、ハロールドに止まりしかば、流人にひとりわが道さして急ぎしが、折れゆく道の曲り目にて、後影の見えずなりし時、黄昏時の暗晴れて、遠山の端の梢より、月はのぼりて昇りたり。ハロールドに身動きもせず、立ちつゝそなたを名殘りをしげに、打ながめてありけるが、老嫗に吾手をハロールドの手にうち載せて

あれ御覽せよ、荒れたる空に月の光りの昇る如く、ハロールド御身の運命も昇るべし。今にていに御身こそ、サクソンの望をデーンの命運もろ共に、一つに歸すべき家の太郎にいにおいさずや。

ハロールドに烈しきさまにて

家兄の遠流とその難難を時として、身の歎を抱くが如き、ハロールドなりと御身い思ふか。

ヒルダ

御身が誠の性質をあらはす聲の聞かるゝい、今ゆ非ず〳〵。然れども日輪の温氣い雷を生じ、運命の榮華い精神の嵐と起すぞかし。

ハロールドい少し怒と含みつゝ

叔母御よ。まろのみい御身が占の物語も、空吹く風のやうゆこそ聞き居たれ。恐ろしさゆも信仰ゆも、皆て御身の呪術祈禱を、頼みやさぬまろい、同じく修驗者の呪文と、巫女の法力とい、小兒の戯と笑ふものゝ。皆て斧ゆ呪ひしたり、又い船の帆と織る事を御身ゆ乞ふたりしたる事のなきこのハロールドの、刀の刃ゆい呪文なし。まろいまろが何事ゆも容易く燃えぬ腦髓と、強き腕とゆ身の命運と〻、任せたり。老嫗よ。御身とまろとの間ゆい、縁い今でいなきぞとよ。

巫女い優然として笑ひ

扨も〳〵、人言容れぬ御人うな。御身い何を思ひ給ふぞ。御身が思ひ給ふものい、御身が才と力ゆて、取り得給はん命運ゆや。

ハロールド

其命運い既ゆ取り得つ。未來の事い云ふも益なし。國の守ゆあらんとて、盟ひし勇士の本心い、正を愛し義と行ふ、外ゆい他事もなきぞとよ。

と云ふハロールドの顔い、さえゆく月影ゆ照らされて、其樣いとも優美ゆ見え、心も詞ゆ違いじとい思いれたり。されども巫女いつく〳〵とその貌と打眺め、耳ゆ口よせ、

其靜なる目の中よ、御身が祖先の魂こそい眠りたれ。其潔き額の下ゆ、御身が母御の血緣たるダニシの王を、位ゆ就けし、智器こそい藏れたれ。

と耳語く詞に、當時おていめづらしき迄ふ巫卜ふ惑れぬハロールドの理義ふ曉き心をも、貫く如く感せしおぞ、ハロールドに最と荒らかふ、

默りめされ。

と忽ち叫び給ひしが、一時の怒を物恥づかしとやおぼしけん少し笑を含みつゝ、

まろが心に悲しくて、唯一人國と遜れ給ひたる、兄君の事のみ思ふ中に、此等の話にせぬこそよけれ。日もいや暮ふなりたるが、路中の用心もよからずと聞く、先頃急ぎ解き放たれたる王か募集の親兵に、治世の夜盗となるもの多しとか。短刀の外物具を着けぬ身に、叔母御の家ふ一夜の宿を願ひ申さん。(といひたてゝ少したゆたひ給ひしが、顏ふ紅葉をそめかけて)その上さいつ頃ハロールドか流され人とおりしを悲み、泣きて別れし御孫君と、其時の如く艶ふる姿は替はらずや、見まはしくこそいたれ。

老媼いとゞ嚴ふ容を改め

孫が涙も其笑貌も孫が自在のものならず。孫が涙は御身が哀しみの泉よりこそ流れいづめれ。孫が笑貌と御身が喜びの光より こそ來るなれ。吁ハロールドよ。今ぞ御身ふ告げ置かん。エデ非スに御身が浮世の妻ふて、汚身とエデ非スが命運は、全く一つのものぞかし。影の形を離れぬ如く、スカルダ神が前の世より、結び給ひし精神と精神とは、別たんとするも別ち難し。

と云へどもハロールドは答へもせず。常ふ變りて足早ふ老媼が家ふと速ぎ行く、心の中ふ此度のみは、ヒルダの豫言を責めざりけり。

第五回　夢かうつゝか寐てか覺てめか

かくてヒルダはハロールドと伴ひ家ふ歸れば、日毎ふ此家ふ集ひ來つゝ、朝夕の食事の惠を受け居る賤しのゝの共に、近隣なる吾家ふ立歸らんとするもあり。又に此家ふ止まりて臥處ふ入らんとするもあり。そも

サクソン貴族の風習は、ノルマン人と同じ事ゐて、下々のもの共を惠む
を常の心とすなれば、誰とも云ゐず酒肉を惠み寢所を貸し、朝より夜ゐ
至る迄、貴族豪家の門ゐ擧りて、貧民の爲めゐ開かれしと、ブリットン人
よも優りたり。

ハロールドと老媼に伴ゐれ、廣やゝある食堂ゐ入られし時、かくと見る
より、皆々喜び打迎へしゐ近き寺院より來居たりし三人の法師のみゐ、
敬禮を表する色ろもなく、常ゐ酒肉を惠まれ夥しき寄附金を受くるヒ
ルダゐばかり目禮しつゝ、中の一人が耳語くゐ、

惡しき家門の一人よな。

又一人の法師ゐ

彼のゴドウ非ンと子供等ゐ、實ゐ無慙の人々よ。

とてハロールドの後影を見送りつゝ、嘲り笑ひたり。客と老媼主人の入
りたる一間ゐ、記臆し給ゐん、先ゐ讀者が始めてヒルダゐ逢ゐれたる處
ゐて二つの太やかなる燈をもて照らされ、その下ゐ婢女等ゐあゐ絲引
きつゝありけるがヒルダゐ打ち見て顏を苦め、

未だ半も出來ぬゐや。早くひきね。強く引きね。

ハロールドゐ絲引く業ゐゐ目もくれず、物問ゐまはしげゐ彼處此處を
うちながめつゝゐゐせし處ゐ、窓の彼邊ゐ壁ありて、喜ゐ色を面ゐ現
し恰もしんみの兄弟ゐ廻り逢ひたる如くゐて、エデ非スゐ走り來りゐ
が、ハロールドの一二歩前ゐてふと止まり、首を低れて默然と立てりし
を、ハロールドゐ呼吸を凝し打守りつゝ、嘆息の外ありけり。襁褓の中よ
り愛で親みし小兒は少女と生立て、今目前ゐ立ちてあり。記者始めてこ
の少女子と見しゐ春なりしが、今ゐ秋の事なれば、此春秋の間なる一年
の星霜ゐ、さあがら菓實ゐ異あらで、少女の美質を熟させたりけん、エデ
非スゐいとゞおとなびて、頰ゐゐ得も云ゐれぬ櫻の匂をのぼせ、天女ゐ
人かと迷はせつべきいともたをやなる容貌ゐ、既ゐ一箇の小兒あら

サクソン貴族の風習は、ノルマン人と同じ事ふて、下々のもの共を恵む
を常の心とすなれば、誰とも云ハず酒肉を恵み寝所を貸し、朝より夜ふ
至る迄、貴族豪家の門ハ擧りて、貧民の爲めふ開かれしと、ブリットン人
よも優りたり。

ハロールドと老媼に伴れ、廣やかなる食堂ふ入られし時、かくと見る
より、皆々喜び打迎へしふ近き寺院より來居たりし三人の法師のみハ、
敬禮を表する色ろもなく、常ふ酒肉を恵まれ膨しき寄附金を受くるヒ
ルダふバかり目禮しつゝ、中の一人ガ耳語くハ、

悪しき家門の一人よな。

又一人の法師ハ

彼のゴドウヰンと子供等ハ、實ふ無悪の人々よ。

とてハロールドの後影を見送りつゝ、嘲り笑ひたり。客と老媼主人の入
りたる一間ハ、記臆し給ハん、先ふ讀者ガ始めてヒルダふ逢ハれたる處
ふて二つの太やかなる燈をもて照らされ、その下ふ婢女等ハあは絲引
きつゝありけるガヒルダハ打ち見て顔を苦め、

未だ半も出來ぬふや。早くひきね。強く引きね。

ハロールドハ絲引く業ふハ目もくれず、物問ハまほしげふ彼處此處を
うちながめつゝふハせし處ふ、窓の彼邊ふ聲ありて、喜の色を面ふ現
し恰もしんみの兄弟ふ廻り逢ひたる如くふて、エデスハ走り來りハ
ガ、ハロールドの一二歩前ふてふと止まり、首を低れて默然と立てりし
を、ハロールドハ呼吸を凝し打守りつゝ、嘆息の外ふなりけり。襁褓の中よ
り愛で親みし小兒は少女と生立て、今目前ふ立ちてあり。記者始めてて
の少女子と見しハ春なりしガ、今ハ秋の事なれバ、此春秋の間なる一年
の星霜ハ、さながら菓實ふ異あらで、少女の美質を熟させたりけん、エデ
スハいとゞおとなびて、頗ふハ得も云ハれぬ櫻の匂をのぼせ、天女ゝ
人かと迷はせつべきいとゞもたをやかなる容貌ハ、既ふ一箇の小兒から

ざるを示すべし。かくてハロールドハ、つと進みてエデスの手と取りしが、吻禮をもせず、又受けもせざりしハ二人共、此時が始めてなりしとぞ。ハロールドハ思ハずも

エデス姫御よ。御身ハ己ホ小兒ならず。されども御身が小兒の時、此ハロールドが愛で親みし心の名殘を、少しホても忘れで取り置き給ハれうし。

エデスハ聞きて笑ましげホ、去ばらくハロールドと顔見合せ、互ホ流す嬉し涙ホ、愛し愛せらるゝ情ハ浮びたり。

ハロールドがこゝホ來りし時より、そが爲め急ホ取設けられし臥處へと退き給ひし迄の間ハ、只暫くの事なれど、互の話も多からず。ヒルダハ自らハロールドを誘ひ、二階ホ到るべき荒造の梯の下ホ來りぬ。此梯ハローマ人が建て置きたるものホ、或るサクソンの貴族が造り加へしものと見えて、二階より自在ホ繩もて釣り上げ得べし。戰國亂世の主人の注意ハ、さもあるべきか。されども二階の一間ハ、當時の豪奢を極めて、寢臺ハ奇木珍材もて造られ、いと風流ホ雕りなしたり。武器ハいと古るびたるものホハあれど錆びもせずして壁ホかゝれり。エデスハヒルダホ隨ひ來りて、香味をそゝげる酒を、黃金の器ホ盛りて客人ホ勸むる間ホヒルダハ私やうホ寢臺ホ向ひ、何やらん呪文を唱へ、枕の上ホ手を載せたりしホ、ハロールドハたゞ盃を手ようとりつゝ打ちはゝ、笑み、

こハ昔の風俗ならんが、まろの考ホてハ、エドワルド王の客館ホ見る、フランス風とこを異えたれ。

ヒルダハ忽ち振りかへり

ハロールドよ。さホていハいず。こハサクソン王が臣下の家ホ宿らせ給ふ時の禮式ホて、昔よりの習ありしが、今ハダニシ人がホの無作法の式ホ變へ、御臥處ホつらせ給ふ前ホ、盃とさへ手ホ取らせ給ふ事も、叶はぬ事とありしなり。

鄙しきまろふ王の禮をあし給うてと、ゴドウヰン一家の氣象と輕んせらるゝ樣ふて、心よからず。されどもうく饗應を受る時ゝ、王公をも羨まず。のう、エデヰス御と

と戯れつゝ、盛れる盃取り上げて、一口飲みて再び盃を置給ふ時ゝ、老女も孫もあらずありて、只一人ぞ殘され給ふ。ハロールドゝ暫しの中思案ふ沈み給ひしが、漸くうちつぶやき玉ふやう

エデヰスの命運ゝ此身の命運と伴ふて離れずとゝ、何故老嫗の申せしやらん。又其時ふ何故吾ゝそを信じて、老嫗てそいとも有難きものありとゝ、思ひしぞ。エデヰスゝ末竟ふ吾妻とあし得べきものあるか。僧王ゝ尼ふせんとの淫下心あるを。嗚呼兄君スウェインの御身の上てそ心を醫するの良藥あれ。吾寺院ふ抵抗して年老と悲みあるものゝ寺ふ與へ、年少と樂きものゝ人間ふ與ふべしと云ゝゞ、法師等ゝ如何ふ答へん。血緣ゝ遠くもあれ、寺院の掟ふ背くものを、ゴドウヰンの一子たる吾の妻とゝなし難し。エデヰスゝ世を捨て尼となるか、又ゝ父としてハロールドの名をゞ呼ばざる小兒等の母とあるより外ゝなし。假面を被り人間の心と情ふ戰を挑む、法師のなき世あらばこそ。

と面色忽ち朱を注ぎ、齒がみをし給ふ有樣ゝ、ノルマン公ゞ怒の時ふも、劣らじと思ふ計ふて物凄く、スウェインの眞の兄弟なるを知るべし。されども己ふ克つを常とせる本心竟ふ勝と制し、思ひ返して窓ふ近づき、戸を開きつゝあなたの方を眺むれゝ、月ゝ隈あく晴れわたりて、遠近の森の外ハ平野一望霜の如く、庭を隔てし岡の上の、ドルイッド教の祠ゝ木の間ふ立ちて、變化の影りとも怪しまれ、テヰウトン教の祠ゝ朦朧として分明ならず。凡そ四方ふ見わたさるゝ景色の中ふて、最も朦朧不分明ある處ほど目を樂ましむるものあけれゞ、ハロールドの目も此處ふ

止まりて、おがめ入りておいせし程ゐ、あやしいうあ、祠の邊の墳の中より、一團の燐火現れ出でて、蒼々と立のぼれり。若しや心の迷りと、猶も眺めておいせしゐ燐火の中ゐよも人間とい思いれぬ程、いとたけ高き人の形現れて、壁ゐ掛けある物具ゐ、似たるものを身ゐ着し、一條の槍ゐすがりてあり。今燐火の光ゐて其面の分明なるまゝゐ、眼をとめて能く見れば、其大きさ太古の神ゐ似たれども、其恐ろしき云いん方なし。ハロールドい、あゐやと一歩退きて、覺えず手もて眼を掩ひ、頭をあげて再び見れい、燐火も形も消えうせて、朦朧たる墳と、祠の外ゐい、目を遮るものもおくありぬ。吾おがら臆したり、心の迷の恥うしさよと、戸を閉ぢ衣を解き、常の如く寢臺の下ゐ跪き、事短ゐ神拜し枕の燈吹き消して、路の疲をやすめ玉ひぬ。

今い燈火の光なけれい、窓より漏れ來る月影い、壁ゐ掛うれる物具と照らし、ハロールドの面の上ゐ落ちゝりて、先ゐ老女が呪文を唱へし枕もさやうゐ見えたり。ハロールドの浄眼いいと靜まて、息遣ひさへ常ゐ變れる事なかりしゐ、明方近く照る月の、傾きかゝれる頃ゐ到り、如何ある夢をや結び給ふ、寢顏乱れて呼吸荒く、顏打ちしかめ齒を食ひしばれる浄有樣いいとものすごくみえたりけり。

明治二十年二月八日版權免許
明治二十年四月　出版
定價金五拾五錢

譯者　福岡縣士族　磯野德三郎　麹町區壹番町十九番地
出版人　東京府平民　井上蘇　神田區裏神保町壹番地
出版人　東京府平民　酒井清藏　神田區表神保町五番地
發兌　東京　岩本米太郎
大阪　梅原龜七
書肆　西京　大黑屋書店
越後　目黑十郎

諸國大賣捌書肆

東京 丸屋書店
同 博聞社
同 叢書閣
同 山中市兵衛
同 山中孝之助
同 六合館
同 原亮三郎
同 文學社
同 中西屋邦太
同 中外堂
同 中近堂
同 大倉孫兵衛
同 吉川半七
同 春陽堂
同 牧野善兵衛
同 澤屋蘇吉
同 集成社
同 尙書堂
同 上田屋
同 開新堂
同 三省堂
同 日進堂
同 文明堂
同 桃林堂
同 柳原友吉

同 巖々堂
同 團々社
同 十字屋
同 倉田屋
同 有斐閣
同 明治書房
同 成美堂支店
同 文海堂
同 慶雲堂
同 小林新兵衛
同 富士屋金十郎
同 南江堂
同 尙成堂
同 富山房
大坂 小川寅松
同 松村九兵衛
同 六合館支店
同 柳原喜兵衛
同 岡嶋直七
同 田中治兵衛
同 前川善兵衛
同 三木佐助
越後 嶋屋六郎
同 上田屋治兵衛

26
128

101311-000-0

26-128

ハロールド物語

ロールド・リットン／著

M20
DBY-0642